

日本女性と日本語に向かう欲望：
金聖民の日本語小説を軸にして

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 富鎮 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000482

日本女性と日本語に向かう欲望

——金聖珉の日本語小説を軸にして——

南 富 鎮

一、はじめに

金聖珉が日本文壇にはじめて登場したのは、一九三六年八月、大阪毎日新聞社が懸賞公募した第一回千葉亀雄賞（長篇大衆小説）に、「半島の芸術家たち」⁽¹⁾が一等入選したことによる。井上靖「流転」と同時受賞であった。以降、金聖珉は植民地の作家としては初めて日本語による長篇大衆小説を書いていくことになる。『緑旗聯盟』（一九四〇年）、『恵蓮物語』（一九四一年）、『天上物語』（一九四一年）などがそれである。

千葉亀雄賞発表の作家紹介によれば、金聖珉の本名は金萬益。一九一五年、朝鮮平壤生まれで、当年二二歳。平壤普通高等学校を中退して「雄図を抱いて上京」したが、「志敗れて」平壤に戻る。その後、同志を集めて朝鮮映画制作に一年余り携わったが、それが解散した後は、平安北道の満浦線北薪峴駅の駅員として勤務しているという⁽²⁾。植民地の田舎の朝鮮人駅員として、日本語による日本文壇を目指したのである。こうした経歴は「半島の芸術家たち」や「天上物語」などの作品中にも随所にみられるが、なによりも金の作品には日本女性と日本語に対する異常なまでの憧れが強く現れている。

日本女性と日本語への欲望を日本語で表したのである。

本論では金聖珉の日本語小説を辿りながら、作品に見られる日本女性と日本語に向かう情熱と欲望を分析する。⁽³⁾ それによつて植民地期朝鮮の文学と思想における文化史的な状況の一側面を浮き彫りにしていきたい。

二、日本女性への欲望

日本人と朝鮮人によるいわゆる内鮮結婚と内鮮恋愛の文学言説は、すでに明治中期から始まり、以降ますます多様化してきた文学テーマである。⁽⁴⁾ 明治期にはおもに支配と被支配による男女表象として、大正期にはプロレタリア文学の同志愛的な存在として描かれ、昭和期には多様な側面として大衆化されていく。つまり、内鮮恋愛と結婚の文学言説はそれぞれの時代を反映し、新たに装いを変えながら展開してきたといえる。それが昭和期になると内鮮結婚の増加という時代背景と植民地の政策的側面から一層多様化していく。なかでも満州事変以降に顕著に現れるのが内鮮一体という国策的な時代風潮による内鮮結婚への大衆的な憧れである。金聖珉の日本語作品にはとくにそうした傾向が強く、主人公の朝鮮人がしばしば日本女性に異常なほどの憧れと傾斜を見せている。

金聖珉は「半島の芸術家たち」発表後の一九四〇年六月、東京の羽田書店から『緑旗聯盟』という長編大衆小説を出版した。受賞作「半島の芸術家たち」は朝鮮で映画制作に携わっている主人公張英一と英姫の恋愛を中心にすえながら朝鮮映画界の裏面を描いた作品である。張英一は友人に頼まれて友人の妹の英姫を映画会社に雇っていたが、彼女は映画社の資本主崔洋秀の気に入られる。崔は彼女を手に入れるために謀略をかけて、張を首にし、詐欺罪で告訴して留置場に入れてしまう。しかし、英姫の献身的な努力と周りの尽力で張は釈放され、英姫とともに満州の映画会社に飛び出していく、

という話である。通俗的な男女恋愛がテーマになっているが、それは朝鮮人同士のもので、内鮮人のことを扱ったものではない。しかし、一九四〇年の『緑旗聯盟』になると、重層した内鮮恋愛と内鮮結婚が扱われ、以降の『恵連物語』『天上物語』『楓の挿話』などの、金聖珉の数少ないすべての作品には日本女性に強く傾斜する朝鮮人が登場する。

まず表題にもなっている「緑旗聯盟」とは、一九三〇年代以降の植民地朝鮮で活動していた代表的な御用団体の名称である。津田栄を中心とした熱心な国柱会（日蓮宗）会員たちによる京城天業青年団（一九二五年二月一日設立）が母体で、緑旗同人会（一九三〇年五月結成）を経て、一九三三年の紀元節に緑旗聯盟として再組織された。『緑旗聯盟』の「作者のことば」によれば、「（緑旗）の象徴するところは、朝鮮の楮山に、総督政治によって緑なす若木が植えられた。つまり日本文化と日本精神が半島の大地に根をおろしたのです」とある。⁵⁾ 緑旗聯盟は機関誌として『緑人』『緑旗』を刊行していた。

さて、長篇小説『緑旗聯盟』のことであるが、ここでは日韓それぞれの二家族四人兄弟における錯綜する内鮮の恋愛と結婚が扱われている。

由緒ある韓国の名門の出である南明哲は、朝鮮にいる親には内緒で日本の陸軍士官学校に進学する。南明哲は四人兄弟で、長兄が京城帝大を卒業しており、弟と妹は東京で音楽学校に通っている。南明哲の陸軍士官学校の親友が小松原保重で、彼には父の事業を手伝っている長兄の小松原保雅と独逸に留学している末弟に、妹の小松原保子という四人兄弟がいる。両家は同じような家族構成である。そして南明哲と小松原保重の妹小松原保子のあいだに恋愛が芽生える。しかし、そうこうするうちに、妹の南明姫と小松原家の長男保雅の恋愛が急速に進行し、二人は周囲の反対を乗り越えて結婚してしまう。そのため明哲と保子の恋愛は一時とん挫する。が、ちょうど日中戦争が勃発し、回りの状況が急変するなかで二人は以前の恋愛関係を回復する。そして将来的には結ばれることが期待される中、南明哲は戦地に向かう。才子佳人であ

る朝鮮人の二人の兄妹と日本人の二人の兄妹が、それぞれ交錯した内鮮恋愛もしくは内鮮結婚をする。いわばもつとも時流的なテーマの作品である。

内鮮恋愛や内鮮結婚が文学と社会の問題として取り上げられることになったのは、日韓合併という歴史的な出来事による。内鮮一体が日韓の結婚に喩えられ、また李垠王世子と梨本宮方子の日韓皇室同士に結婚に象徴される政略的な出来事により、内鮮結婚は時代の主流的な言説として定着していったのである。明治期からの民族と国家の隠喩的な表象の側面、プロレタリア文学においての同志愛の側面、昭和期の国策的な側面などの、さまざまな時代層はあるが、内鮮結婚は一貫してもつとも時流的な文学テーマだったのである。そこには、内鮮恋愛や内鮮結婚がもつ政治性にもかかわらず、いわゆる国家と民族の障壁を乗り越えて恋愛と結婚を夢見るという、もつとも大衆的な幻想と願望があったのである。『緑旗聯盟』はまさにそうした側面をうまく捉えた典型的な作品である。内鮮結婚という国策的な方向に沿いながら、一方では民族をのり超えて困難な恋愛を成し遂げるといふ、大衆的で、通俗的な幻想によって包み込まれているのである。

通俗性の背後にある顕著な国策的な側面であるが、『緑旗聯盟』の南明哲は、早稲田大学に通うと家族に偽ってまで士官学校を志願し、後には中尉に任官し、戦地に向かう。つまり、南明哲は日本に大きく接近し（二人の弟妹もそうであるが）、いわば日本精神に目覚め、軍人として従軍していく朝鮮の青年なのである。作品ではこうした特別に目覚めた朝鮮人青年と日本女性との恋愛が設定されている。このような図式は内鮮恋愛と内鮮結婚においての国策的な一典型といえる。

たとえば、陸軍省報道部後援と朝鮮軍司令部報道部制作の「君と僕」（『映画評論』一九四一年七月）では、日本精神に目覚めた朝鮮人志願兵と日本人女性の恋愛が描かれている。後に映画になって大がかりに宣伝されたこの作品では、『緑旗聯盟』同様、日本の兵隊になっていく朝鮮人青年に日本女性があてがわれている。さらに究極的な一例は、『緑旗聯盟』刊行の三ヶ月前から『緑旗』に連載された李光洙「心相触れてこそ」（一九四〇年三月〜七月）に見ることができる。そこで

は日本人の東武夫と文江の兄妹が、朝鮮人の金忠植・石蘭兄妹と交錯した恋愛関係にはいるが、東が入営したので忠植は軍医を志願し、残された日韓の二人の女性は看護婦になって戦地に向かう。日本人と朝鮮人の青年がそれぞれ入隊、志願し、二人の日韓の女性はそれぞれの愛する人のために看護婦になって戦争に向かうという、まことに申し分のない国策的な設定である。兄妹同士の交錯した内鮮間の恋愛こそ内鮮一体の思想をよく反映するものといえよう。日本男性が弱い朝鮮女性を獲得していくという文学的・政治的な言説から由来する朝鮮側の不満や、朝鮮の男性に「大和撫子」をあてがわせる通念からの日本側の不満を解消するもつとも平等的な言説といえよう。「緑旗聯盟」の交錯した恋愛もこれに当てはまる。

しかしながら、『緑旗聯盟』をはじめ、金聖珉の作品は時局的で、時流的な内容であるにもかかわらず、それがことごとく通俗性に流れている。才子佳人による恋愛と結婚、都会的な趣味、芸術への憧れ、徹底した西洋的な趣味、氾濫するカタカナなどがそれである。時局的な素材が通俗化され、通俗的な内容に時局性が無自覚的に盛り込まれているのである。通俗的な風俗を描くために、時流的で国策的な内容が盛り込まれた側面もある。そのためなのか、『緑旗聯盟』ではその強い国策的な構造にもかかわらず、意外にそうした印象が薄い。むしろ作品での国策的な内容は大衆小説としての通俗性や娯楽性を維持していくための、一方便として使われているようにも思われる。⁽⁶⁾ 金聖珉にとってより重要なのは、日韓の男女の恋愛や結婚がもたらす大衆文化的な低俗趣味、洒落た教養などの幻想的な通俗性だったように思われる。それが植民地最初の大衆長篇作家として成り立つ金聖珉の土台でもあっただろう。たとえば、『緑旗聯盟』には小説中の小説（額縁小説）の形式で、京城の喫茶店にたむろしている小説家志望の朝鮮人青年がいきなり自作の小説を読み上げる次のような場面がある。

田園交響樂が終る頃、小説の筋は最高潮へ達した。それは、小説といふよりも決闘状に近かつた。あらゆる日本的なものへ対する断乎とした否定で、作中に現れる内地人は悉くが悪る者であり、その反対に半島人は、泥棒でさへが善人であつた。わけを知らずに愛し合つた内鮮の男女は、最も悲惨な運命に遇はなければならなかつた。トルストイとドストエフスキーとが戸惑ひしながら現はれて、渋々と文章を綴り合せて行つた。そして、トルストイが内鮮結婚を猛烈に反対し、ドストエフスキーがそれに全幅的な援助を与へてゐた。ヒロインである日本娘が、―但し彼女は美人であつた。―男の一徹な主義故に、愛情をいれられずして、自殺してしまふと、同時に小説も終りを告げた

京城の喫茶店でたむろしている青年文学者はいちおう内鮮結婚について批判的であるが、その状況から内鮮結婚が幅広く受容され、通俗的で大衆的な憧憬になつている時代状況が窺える。このように、『緑旗聯盟』をはじめ、金聖珉の数少ない作品には内鮮結婚と内鮮恋愛を夢見る登場人物が多く登場している。これには内鮮恋愛に対する作家自身の憧憬が大きく介在しているように思われるが、その内容は悉く思想性と政治性の欠落した無自覚的な通俗性で一貫している。『緑旗聯盟』の翌年の一九四一年に発表された『恵蓮物語』からもそれをみる事ができる。

「恵蓮物語」は、昔愛し合つた日本女性（樟子）が今は朝鮮女性と結婚している朝鮮男性に告白する形式の入子構造の作品である。ある日、かつて愛しあつた樟子が満州に行く途中で「私」を訪ね、「恵蓮の物語」を始める。その話はどうである。話の中の主人公である朝鮮人の李奎澤は、妻（恵蓮）をこよなく愛していたが、妻は教育を受けておらず日本語が話せない。それを過剰なほど気にしていた「私」は、妻に日本語を勉強させるため、むりやりに日本人のママが経営するカフェに就職させる。その妻に日本語を教えたのが樟子である。恵蓮は夫の愛情を取り戻すために樟子や日本人の客を相手に懸命に日本語を勉強する。それを夫の李は二人の関係を隠したまま週に何遍も見に来ている。そのなか、夫の李と

日本女性の樟子は相思相愛の関係になる。惠蓮は二人の関係に疑心暗鬼し、事情を知らない樟子は惠蓮を恋敵として嫉妬し、たくらんで彼女を墮落させる。自棄になった惠蓮の行為がさらに夫を刺激し、二人の関係は修復不可能になり、別れてしまう。そして話は現時点に戻り、樟子は「私」にこうした自分の恋愛話を語り終え、満州に旅立ってしまう。

『惠蓮物語』は全体が日本女性樟子をめぐる内鮮恋愛が重層的な構造になっている。その中に惠蓮の話が挿入されている構造である。語り手の樟子は請負師を親にもつ朝鮮出身の日本人である。朝鮮生まれで、請負師という親の職業も手伝って日本人との結婚がなかなか難しい。そこで出会ったのが作曲家を目指していた朝鮮人の「私」である。「私」は名門の出身であるが、朝鮮人ということで結婚は反対される。二人は駆け落ちを約束するが、「私」が約束を破ったため彼女は一人で新京に出奔してしまう。そのなかで自墮落した樟子は朝鮮に戻りカフェで働くことになる。そこで惠蓮と惠蓮の夫である李と出会うことになる。その出会いについて樟子は「私」に、「わたくしは懲りもせず、また朝鮮の方を愛しはじめたのでした」と告白する。一方で彼女は、「私」の妻が朝鮮人で日本語を解しないことを指し、「それでは、あなたもあまり幸福な結婚をなすつてゐないのね」と断定したりする。つまり、朝鮮人との結婚が不幸な結婚として認識されているのである。

さて、樟子は「私」との結婚が周囲の反対で遂げられず、カフェの女給になって今度は李に強く惹かれていく。二人は相思相愛の関係にまで発展するが、最初の出会いから二人は内鮮結婚における愛情の重要性を話し合う。李は自分が惠蓮の夫であることを隠しながら虹子（樟子の店での名前）に次のようにいう。

「僕の友人のなかにも、二三さういふ例を見てゐます。内鮮結婚についてはまだ断定的なことはいへませんが、しかしお互ひが愛し合つてゐる場合であれば、一しよになるのがほんたうではないでせうか。眼の前に障害があるのを覚

悟しながら、なほ愛せずに見られない気持は切実だとおもひます。」

李はこういいながら、惠蓮の夫であることを隠して虹子との相思相愛の関係を続けていく。しかし、最終的には虹子に告白された李はすべてを白状し、二人の内鮮恋愛は破綻する。また作品では直接的な形ではないが、李の内鮮恋愛に対する羨望が執拗に現れる。李が惠蓮の無学を悩み日本語学習のために彼女をカフェへ就職させたのも、惠蓮に日本女性的なものを要求したからである。朝鮮語の読み書きはいつでもよく、ひたすら日本語で喋ることを要求し、わざと日本人の居住区で暮らしたのも惠蓮に日本人としての教養と資質を要求したからである。内鮮結婚を夢見る心地から李は惠蓮を日本人に変えようとまでしたのである。惠蓮に対する人間改造に近い努力は李自身の日本女性に対する憧憬と内鮮結婚への羨望が生み出したものといえよう。そうした李の心情は次のような態度からもよく窺える。ホテル入る前、李と惠蓮は次のような会話を交わす。

「しかし、ボーイは何とみるだらう。」

「愛の逃避行。」

「ささやくやうにいつた」

「いや、さうはみまい。お前はれつきとした貴婦人だから——俺は、さうすると、内地人だといふことにしよう。」

「ぢや、あたくしも。——」

「お前は、駄目だ。お前は、服装もいいし、朝鮮人だといった方がかへつて格がつく。——それで、二人一しよに行けば内鮮一体だ。」

「名前は、——」

「たからべけいのすけ。」

「タカラベケイスケ？」

「財産家だ。——」

李と恵蓮はそれぞれの一方が日本人になりすまし、疑似の内鮮恋愛を演出する。夫婦としては考えられない行動であるが、そうした演出を可能にするのが日本語である。李が恵蓮の日本語教育に異常なほどの情熱を見せたのはこうした疑似内鮮恋愛を演出するためでもある。二人の疑似内鮮恋愛の演出は、内鮮一体の具現といった政治的・思想的な意味というより、たんにそれが恰好いいもので、大衆風俗に合致しているからであろう。李が日本名の「たからべけいのすけ」を名乗ったのも同じ感覚であろう。そこにはあまり思想性が感じられない。たんに大衆的な欲望としての内鮮恋愛の演出であり、日本語への傾斜であり、また日本名の名乗りである。国策的な言説がたんに無自覚的な大衆的な流行として取り入れられているのである。同様の傾向は「天上物語」にも一貫して見られる。

『緑旗』に連載された「天上物語」は、字の読めない朝鮮人女性と結婚した田舎の駅員が、交換手の日本人女性、日本の女流詩人、鉄道局勤務の日本人女性へと、次から次へ惹かれていく話で、やや自伝的な性格の強い作品である。

主人公「私」は親の強引な勧めで妻と結婚したが、妻は無学の人で日本語がまったく理解できない。そうした妻の無学に「私」は様々に妻の教育を試みたが、妻の非協力で私の努力は悉く失敗する。それに落胆した「私」は日本女性への憧憬から鉄道局の交換手に密かに恋情をいまく。また謎の日本人女性から勧められ、鉄道の機関紙に日本語で作品を発表し、それが一等作として選ばれる。さつそく二人は文通を開始し、一種の相思相愛の関係になり、彼女が「私」を訪ねてくる。

同時に「私」は自分の文学的な才能に共感を抱く日本人の女流詩人相良志智子に恋情をいだいていく。文通を通して二人は芸術的に刺激しあい、彼女に対する「私」の恋情は募っていく。それがこうじてついに「私」は鉄道局の駅員をやめて上京（東京）することを決心する。そこで作品の連載が中断するが、主人公はついに東京に行つて女流詩人に会うことになる、と予告されている⁽⁷⁾。

このように、「天上物語」での朝鮮人の「私」はすでに朝鮮女性と結婚しているにもかかわらず、次から次へ日本女性に惹かれていく。日本女性に憧れている朝鮮人男性の鬱屈した心情が、金聖珉の作品には彼自身の精神内部を覗かせるように、随所に見られている。「恵蓮物語」「天上物語」などに見られる主人公の朝鮮人妻への過剰な日本語教育、または家庭内での日本語会話の要求などは日本女性への欲望がもたらした変質的な側面といえよう。朝鮮人妻を日本女性として再教育することによって代償的に得られる内鮮結婚の疑似体験であるといえる。

一方で、短篇小説「楓の挿話」ではおでん屋の日本人マダムに惹かれる朝鮮人の「私」が登場しているが、その「私」なる人物も『恵蓮物語』『天上物語』での朝鮮人男性同様、作者の分身として内鮮恋愛を夢想している人物といえよう。このように、金聖珉の作品には日本女性に対する欲望が、変質的な形までになって、大衆小説と通俗性の中で露骨に表れている。金聖珉のこうした日本女性への情熱は、それがまた当時のもっとも安直な大衆趣味と符合するものである。つまり、日本女性への憧憬と情熱は植民地期のもっとも大衆的な欲望でもあり、またそうした大衆性こそ植民地の思想と精神の重要な側面である。植民地期に日本女性への憧憬をもつ膨大な小説が書かれたのは、植民地期の精神史と深く関わっている。たんに国策的な強要によって内鮮恋愛を描くのではなく、日本女性への憧憬は国策以前に大衆的な素材として、植民地に溢れていたのである。国民文学が唱道されたときにこのテーマが噴出したのは、それがもつ大衆的な通俗性がすでに幅広く充満していたからであろう。

三、日本語への欲望

内鮮恋愛と内鮮結婚に向かう植民地期の通俗的な欲望は、その当然の成り行きとして日本語を要求する。日本人との内鮮恋愛と内鮮結婚のためには日本語が要求されるからである。また日本語への欲望によって内鮮恋愛と内鮮結婚の欲望が確保されることにもなる。

『緑旗聯盟』では東京で暮らしている三人兄弟の南明哲、明姫、明洙は、普段の生活の中でも日本語を使用している。南明姫は日本語で手紙を書き、日本文に合わせる形で名前も明子で署名をする。また彼女は普段の電話口では便宜のため南（みなみ）を名乗ったりする。日本語で日常生活をし、日本名を名乗る過程の中で内鮮恋愛と内鮮結婚が前提されているのである。

たとえば、小松原保子との恋愛が深まるなか、陸軍少尉として京城に赴任した金明哲は、面会に来た兄の明燁と次のようなやりとりをする。

「なかなか、軍服がよく似合ふよ。軍隊は面白いか。」

明哲は、兄の押しつけてくるやうな朝鮮語に、すこし当惑した顔をして、

「兄さん、すみませんが一つ、内地語で話してくれませんか。」

と言った。

明燁は、不思議な顔をして、

「お前は、朝鮮語がわからないのか。」

「ですが、ここは連隊のなかですから。——」

「連隊のなかでは、朝鮮語を話してはいかんのか。」

明哲は、兄の顔をちよつとみて、黙つた。

「お前の方で、朝鮮語を話すのが礼儀だと俺はおもふんだが。——それに、俺はどうも、日本語はうまく話せんよ。」

「……………」

「しかし、お前ももう、朝鮮語はわからなくなつてきたらうから、誰か通訳するものでも、さういつて来ようぢやないか。」

それで仕方なく明哲は朝鮮語で話すことになるが、五年あまりも朝鮮語を口にしたことがないのでうまく話せず、口ごもつてしまう。それを兄の明燁は皮肉る。

「お前も朝鮮語を忘れるやうになつたのでは、そろそろ一人前にちかいよ。その上、内地人の細君でも貰へば、もう立派なもんだ。」

明哲はいく分反抗的に、さうしようと考へてゐます、と言つた。

「さうしたがいい、さうしたがいい。」

明燁は笑ひながら、

「さうしたら、今度は、名前もついでにかへるのだな。部下を指揮するのにも、その方が張合があるだらう。南明哲

が指揮するのでは、指揮される方が、かへつてまごつくといふもんだ。」

日本語の常用と内鮮結婚、さらに創氏改名という順序が自ずと提示されている。内鮮恋愛においてはなによりも日本語が前提とされ、日本語によって内鮮恋愛と内鮮結婚が担保される。そこに朝鮮語は介在しない。内鮮結婚と内鮮恋愛は朝鮮人が日本語を獲得していく行為と連動しているのである。そのため、内鮮恋愛のためには朝鮮人の日本語力が盛んに問われる。

たとえば、『恵蓮物語』での主人公は無学の妻に日本語を教えるためにカフェに就職させる。日本語に異常な執着をみせる。また家庭内でも日本語のできない女房に主人公はわざわざ日本語で話しかける。それに妻の恵蓮は辟易するが、夫はますます熱心になる一方で、日本人街に引越して妻のところになんと日本人の小使を送ったりする。挙げ句の果てには、日本語の勉強のためにカフェに就職した妻に、夫は客を装って訪ねて日本語を教えたりする。

奎澤はミソノへ来ると必ず一度は恵蓮を呼んで言葉を試みた。

「内地語はむつかしいとおもひますか。」

「いいえ、そんなにむづかしいとおもひません。」

「お友達のなかでは誰が一番お好きですか。」

「虹子ねえさんが一番お好きです。」

「いや、好きです。」

「はい、好きです。」

「朝は何時に起きますか。」

「ジュウジにおきます。」

「ねむたくありませんか。」

「イイエ。」

「たべものは、何が一番好きですか。」

「ライスカレーが一番好きです。」

「いや。——」

「はい、好きです。」

「さう。——では、今度はアクセントの練習をさせうね。アクセントといふのは、つまり言葉の抑揚のことです。上げ下げのこと。——」

すでに指摘したように、『恵蓮物語』では朝鮮人妻の恵蓮を日本女性として教育させることで、内鮮恋愛を擬似的に演出している。そこには朝鮮人女性と結婚してしまった作者自身の屈折した心理が投影されている。また内鮮恋愛と内鮮結婚への願望は親が決めた旧来の結婚（あるいは早婚）に対する反発としての、自由恋愛結婚への傾斜でもある。親の干渉を排除した自由恋愛による結婚のもっとも象徴的な形態が内鮮間の恋愛と結婚として想定されうるのである。内鮮結婚は必然的に自由恋愛を前提としているからである。こうした側面は「天上物語」でも強く現れている。

「天上物語」での「私」は親の意向によって無学な女性と結婚した。しかし妻の無学を恥ずかしく思った「私」は妻に日本語による生活を要求する。それに妻は、「私の過度な日本の生活へ対する接近の強制を苦痛だといひ出し」、口論が絶

えない。

「お前は、俺が一生涯鉄道員で終ることをのぞんでゐるらしいが、しかし、俺が若し鉄道員で終るとすれば、どうしても試験をうけて昇進しなければならぬだらう。さうすると俺たちは内地人と一緒に官舎住ひをしなければならぬ必要が生じてくる。お前も当然、内地語を話して貰はなければならぬ。お前にそれをするだけの能力がないことは既に試験済みだ。それでもお前は俺に一生涯鉄道員生活をしてゐて欲しいと思ふのか」

すると妻は曖昧に笑ひながらいつた。

「さうですわ。他に出来る仕事があなたには何もないのですもの。——試験をうけて昇進なさるお氣持があれば、それはわたしたつて一生懸命言葉ぐるゐ習ひますわよ。だけれどあなたにははじめつからそのお氣持がないのですわ。ですからわたしも張合がないのですわ」

日本的な生活に対する妻の反発にもかかわらず、「私」は一方的に日本的な生活を取り入れ、日本語による生活に傾斜していく。また「私」は日本の女流新人から日本語で書くように勧められ、日本語創作が鉄道機関の雑誌に一等作として選ばれる。その作中では妻は教育を受けたインテリに設定され、「私」と妻の毎日の会話は「国語で行はれてゐる」ことになっている。さらに「私」の受賞作は、審査後記で「朝鮮人が国語をもつて小説を書くことは不自然である筈なのにかういふ現象に対して選者は理解することが出来ない。これは翻訳された国語ではなくして国語そのままである」と、その日本語能力が賞賛される。そして「私」は女流詩人を頼りに日本語作家を目指して東京に進出していくことが予告される。

このように金聖珉の作品には日本語に傾斜していく朝鮮人が多く登場している。しかしながら一方では、そうした朝鮮

人を見ている日本人の視線も描かれている。短篇小説「楓の挿話」は朝鮮人の日本語をながめる日本人の差別的な視線が取り上げられている。

紳士は先づ私たち（朝鮮人、筆者注）の階級を三つに分けて、知識階級の内地語一般階級の内地語、下層階級の内地語と分類し、一々それぞれ真似をして見せた。それによると知識階級の内地語はアクセントが逆なのである。つまり反対のアクセントで話をするのであるが、紳士の口真似によるとそれは恰度鶯鳥の啼声にも似たアクセントであった。要約していへば、鶯鳥が日本語を話せばかくやとも思はれるアクセントなのである。一般階級の内地語には濁音がない。マタム、ミス（水）をくれ、といふことになるのであるが、もう少し委しく説明すると、ボク（僕）はノト（咽喉）カ、かわいてミス（水）がのみたいよ、といふことになるのである。下層階級のはもう目茶苦茶であつた。私は自分のことをいはれてゐるのだといふことを忘れて笑ひ出してしまつた。

金聖珉の作品に見られる朝鮮人の過度なほどの日本語への傾斜とは裏腹に、朝鮮人の日本語自体が日本人にひとつの差別の対象としても受けとめられていたのである。大衆小説の中で日本語への傾斜を盛んに取り入れながらも、その一方で金聖珉自身は朝鮮人の日本語がもつ差別性と滑稽さも認識していたようにも思われる。しかし、金の作品に見られる日本語への欲望はそうした認識を遙かに超えて存在していたといえる。

四、おわりに

以上見てきたように、金聖珉の日本語小説には大衆風俗として、内鮮人の恋愛と結婚が頻繁に取り扱われている。そしてまたそれが、戦時期の国策的な素材と同居している。大衆風俗小説の中に国策的な要素を加味するのは、金聖珉特有のものではなく、戦時期に流行した日本の大衆小説にも共通するものである。金聖珉はそれを「植民地文学」の大衆作家に相応しく、朝鮮の風俗性として取り上げたのである。『緑旗聯盟』がそのストーリーにおいては典型的な国策的作品でありながら、細部の描写と舞台背景ではそれとは正反対の雰囲気醸しているのはこうした風俗性のゆえである。それは一見して偽装国策のようにも思われるほど、国策の時代精神とは全く相容れないものである。日本語で書いた朝鮮人作家の膨大な国策的な作品とは全く異質的な雰囲気は、こうした大衆小説の側面から由来するものと思われる。そこには思想性が最初から欠如しているのである。そのため、日本語と日本女性への大衆的な欲望が無自覚的にそのまま露出している。それは、彼自身の精神性を反映するとともに、広く流布した植民地の大衆的な欲望でもあったと思われる。

一方で、金聖珉のこうした無自覚的な大衆性によって日本語へ傾斜する朝鮮人の内面が率直に覗かれている。思想性と倫理性を装うことなく、日本語へ傾斜する内面心理がむき出しに表れているのである。そうした日本語への欲望が大衆的な風俗性として盛り込まれている。日本語で話す朝鮮人の主人公たちの設定は、国策と思想性以前に洒落た風俗的な要素として存在しており、それが金聖珉の作品の中には無自覚的に取り込まれているのである。こうした無自覚的な大衆性によって投げ出された日本語への大衆的な欲望こそ、もしかすると最も普遍的な植民地的現実だったかもしれない。

〔注〕

(1) 「半島の芸術家たち」の連載は、『サンデー毎日』一九三六年八月二日、九日、一五日、二三日、二九日、九月二日、九日、一六日にそれぞれ連載された。

(2) 『サンデー毎日』（一九三六年八月二日）の「作者紹介」による。

(3) 金聖珉を視座にし、朝鮮人日本語作家における日本語の問題については拙論「なぜ日本語で書くのか―金聖珉の日本語小説を視座にして―」（『翻訳』の圏域―文化・植民地・アイデンティティ）筑波大学文化批評研究会編、二〇〇四年二月、所収）がある。

(4) 「内鮮結婚」については拙稿「内鮮結婚の文学」（『近代文学の〈朝鮮〉体験』勉誠出版、二〇〇一年、所収）での一連の考察がある。

(5) 金聖珉『緑旗聯盟』（羽田書店、一九四〇年六月）の「作者のことば」。

(6) 黒川創篇『〈外地〉の日本語文学選―朝鮮』（新宿書房、一九九六年）の「解説」では、『緑旗聯盟』の通俗性が田中康夫『なんとなく、クリスタル』に喩えられ、同時代の国策的な「思想性」とはかけ離れていると指摘されている。

(7) 金聖珉「お断り」（『緑旗』一九四一年二月号）。一五九頁。

【金聖珉日本語作品目録】（大村益夫・布袋敏博編『朝鮮文学関係日本語文献目録』を参照）

長篇小説「半島の芸術家たち」（『サンデー毎日』、一九三六年八月〜九月、八回連載）

長篇小説『緑旗聯盟』（羽田書店、一九四〇年六月）

短篇小説「楓の挿話」（『月刊文章』、一九四〇年一〇月）

アンケート「齟齬をくひとめる」（『緑旗』、一九四〇年一〇月）

長篇小説「天上物語」（『緑旗』、一九四一年三・六・八・九・一〇月、五回連載で中止）

長篇小説『惠蓮物語』（新元社、一九四一年八月）

その他「お断り」（『緑旗』、一九四二年二月）

エッセイ「日本の優秀さをかく」（『緑旗』、一九四二年三月）

詩「夜明けの序詞」徴兵制施行せる」（『緑旗』、一九四二年七月）

シナリオ「半島の春」（一九四二年、明宝映画）

長篇小説「天上物語」（『太陽』、一九四三年七月・九月、二回連載で中止）

その他「編集後記」（『太陽』、一九四三年一月）